

浮世絵で学ぶ お江戸子育て



1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史資料の収集と研究を続けている公文教育研究会。広報の内山岳志さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えてください。

お稽古

江戸の子どもたちの お稽古事情

江戸時代の子どものうちのお稽古事の様子を描いた浮世絵はたくさん存在します。「手習」とある右上のコマは、寺子屋の様子。机の上で正座をしているのは、叱られて罰を受けている男の子。線香が燃えつきるまでの約30分間、器の水をこぼさないよう、じっとしていなければいけません。しかし口を大きく開けておしゃべりをするそのユーモラスな表情は、どうも反省しているようには見えません。また、後ろ向きに座っている子は、師匠がお手本を書いてくれた「折手本」を左右にパラパラと広げながら、お経を読むお坊さんの真似をして遊んでいます。

諸芸稽古図会(部分)

歌川広重
天保期(1830-44)

歌川広重は「東海道五十三次」や「名所江戸百景」に代表される名作風景画を残した絵師として知られていますが、実は子ども絵の名手でもあります。この「諸芸稽古図会」は、計16種類のお稽古事の様子が描かれた4枚組の作品。今回はその中から「手習」「まり」「いけ花」「浄るり」の4つのお稽古事を取り上げました。広重が描く子どもたちの豊かな表情や、細かく描き込まれた愛らしい仕草が魅力的です。

えて、一生懸命お稽古に励んでいるようです。しかし後ろの女の子たちはどうでしょう。「あっかんべー」としてみたり、下あごを突き出してみたりと、「変顔」を見せ合って遊んでいます。お稽古の最中に遊んでいたのは、男の子も女の子も変わらないようですね。

「いけ花」と「まり」のコマは、いずれも子どもが失敗したときの様子なのですが、師匠の様子に注目です。袴をはいた「いけ花」の師匠は、自宅であろう稽古場で水をこぼされたにも関わらず、「あーあ」と言いながらも怒る様子はありませぬし、顔に「まり」をぶつけられた師匠にいたっては、怒るところか、喜んでいうにさえ見えます。

このような江戸の学びやお稽古のおおらかさは、主体的な学びによる道徳的な成長を重んじる儒教的教育観がその背景にあったと言われています。しかしこの浮世絵を眺めると、子

江戸ミニ知識

寺子屋に入門する吉日、お稽古事を始める吉日

江戸時代、寺子屋入門の吉日は2月の初午（最初の午の日）、お稽古事を始める吉日は6月6日とされていました。しかし江戸時代末になると、寺子屋入門も6月6日が吉とする記録があらわれます。江戸の人々が、文字の読み書きをする寺子屋と芸事のお稽古を区別しなくなってきたのかもしれない。ここで一句。「初午の日から夫婦は ちっと息」これは、子どもが寺子屋に通うようになり、その間に一息つけるようになった親の気持ちを詠んだ江戸時代の川柳です。この気持ち、よくわかりますよね。

どもが大好きな江戸の師匠たちは、愛嬌あふれる子どもたちの笑顔を見るのが楽しくて、多少のことは目をつぶっていただけなのでは？なんて想像してしまうのです。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note